

## 青年海外協力隊で育った種

佐竹 直子

冬空の日本を後に、飛行機で四時間、向かった先は、フィリピン共和国。青年海外協力隊の保母（現在は保育士）隊員として、期待と不安という種をもって、熱気に包まれた任地の土を踏みました。事務所への挨拶やオリエンテーション、歓迎会などを終え、隊員寄宿舎に戻った私は、あまりの暑さに飲み物を求めて台所に行きました。する

と、流しの三角コーナーに蛙の卵のようなものが、コップ一杯ほど捨てられているではありませんか。驚いて、しばらく観察してみました。動く気配はありません。丁度現れた管理人のフィリピン人女性に聞くと、彼女は大笑いして「これは、パイヤの種よ！」と教えてくれました。その日から「好奇心」という種も加わり、私が過ご

した三年間（通常任期は二年ですが、延長したため）は、「これなあに？」「なぜ？」の毎日でした。

### 言葉は買い物で

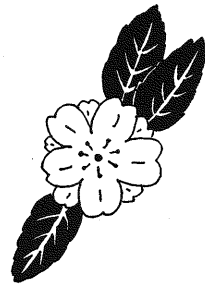
日本での研修期間中も語学の訓練はありますが、フィリピンは、島の数（約八十）ほど方言があるため、現地についてから現地語学訓練があります。これは大変楽しい授業で、ゲームをしたり、食事をしたり、散歩に出かけたりしながら行きます。とりわけ現地の乗り物に乗って、買い物に出かけるのは、言葉を習得する上で最も効率的であり、これから教える立場になるとしても参考になるものでした。「好奇心」の種をもった私は、買い物の中で、どんどんその種を蒔いていきました。お陰で次にその場所へ行くと、お店のおばちゃんが覚えていてくれ、安くしてくれたり、世

間話をしたり、しっかりと種が成長していました。改めて、人間が社会生活をする上で「ごっこ遊び」を経験することが必要であることを実感しました。

市場で品物を見ながら名前を覚えたり、交渉の仕方を学んだりすることは、現地で生きていくために不可欠なことです。日本では、ほしいものをレジに持って行き、一言も会話しないで品物が手に入ったり、カタログで全て手に入ったりする合理的なしくみになってしまっています。それに比べ、フィリピンの生活は無駄が多いような気がします。しかし、毎日生きている実感、生かされている実感がありました。

### 命をいただき、生かされている

受け入れ先の社会福祉開発省第三地域事務所



は、ピナトゥボ火山が噴火した被災地で、私の任務は「被災地の自立支援のための保育所整備と保育計画・内容検討、保育者養成」などでした。普通スタッフの住居は、安全性の高いところにあるのですが、限られた期間で任務を遂行するには、避難所にホームステイしたほうが良いだろうと考え、電気・水道・トイレのない現地の人たちと同じ環境での生活を希望しました。最初はお客様扱いで、「何もしなくていいから休んで」と言われ、食事もできたものをいただくだけでした。火山噴火の被災地ですから、あたりは灰だらけ、砂

漠のようでした。そんな環境の中で、自給自足に向けて、生命力の強いバナナやココナツ、豆類野菜など、様々な種を植えていました。真っ白な灰の中から小さな緑の芽が見えたときは、まさに「そこに生きる希望が見えた」ようでした。

雨季になると、どこから来たのか蛙の鳴き声か聞こえるようになり、明け方まだ暗いうちに男の人たちが鍋を持って蛙取りに出かけます。戻ってくると今度は女の人たちが、蛙の皮むきをして、油でいため、にんにく、胡椒、醤油、酢で煮込みます。

お祭りや結婚式などのお祝い事があると、飼っていたニワトリや豚、番犬までも料理します。初めの頃は、ついさっきまでかわいがっていたものを解体し、調理し、試食までするなんて、「なんとむごいことを！」と思いましたが、日本ではどこでどんな育ち方をしたのかもわからず、すで

に切り刻まれバックになって売られているものを食べているわけで、どちらも食べることは変わりありません。しかし、命をいただいて生かされている意識は雲泥の差があると思います。食欲と生き方は深い関係があるように感じました。

### 人間関係の種をもつて

フィリピンでの生活は、学ぶことの多いものでした。保育内容にしても、何よりも基本においているのが「人間関係」で、そのためなのか国民性なのか、道を歩けば笑顔で挨拶し、大人でも友達同士手をつないで歩き、初対面の人に会うときは、必ず握手で紹介され、直接プライベートな質問をどんどんしてきます。最初はあまりに立ち入った質問に答えるのも戸惑いましたが、興味をもつてその人を知りたいと思うことは、その後の

かわり方を豊かにしたい気持ちの現れと考えれば、聞かないことが失礼にも思えてきました。

人が幸せに生きるために「人間関係」が重要な種であることを学び、その種をもつて帰国した私は、今地元長岡市で子育てのネットワーク作りを仕掛けています。様々な思いをもつ団体や個人、民間も行政もつながって、子どもという種が丈夫に花咲くよう育ちあえる関係を作りたいと思います。

丁度、協力隊で被災地を経験し、長岡で中越地震を経験し、現在では自称国内協力隊をやっていますが、ピンチはチャンス！あの時現地の人が忘れなかった笑顔と協力、開拓と希望の種が、中越の地にも大きく花咲くように、せっせと蒔いた種の水やりでもしましょうか。

(NPO長岡子育て支援三尺玉ネットワーク代表)